

# 山とスキー

第九十七號



札幌 山とスキーの會 發行

昭和五年一月十六日印刷納本

昭和五年一月十九日發行  
(十號一冊)

◇すまりをて得を讀愛御の下殿宮父秩りよ號刊創は誌本◇

次目號七十九第

記 事

ジャムプ競技會の準備と競技の進行法

廣田 戸七郎

〔一〕

積雪期に於ける中級山岳

小池 文雄

〔七〕

一九二八年 *Alut-Pamir* 遠征日誌より (一)

W. R. Kickners  
古山 甲二抄譯

〔四〕

雜 錄

〔三〕

寫 眞 版

ツイナルロートホルンよりオーバーガーベルホルン  
ダンブランシユ及びマッターホルンを望む

松 方 三 郎

大 雪 山

武野 穀 一 郎

昭和五年一月發行





ツィナルロートホルンよりオーバーガーベルホルン  
ダンブランシュユ及びマツターホルンを望む

松 方 三 郎

## ジャムプ競技會の準備と競技の進行法

廣 田 戸 七 郎

此處に申します「ジャムプ競技の組織と準備」と言ふことは、ジャムプ競技を進行させて行く、競技主催者に心得て居て頂きたいこと、そして競技者にも守つて居て頂きたいことでありまして、内容はヘルセット中尉一行の言行の一端を参考にして書きました。

競技を開催するに當つて、主催者も競技者もお互にルールに精通して居らねばならないことは、今更申し上げるまでもありません。

競技主催者に風雪の困難から来る修理の難があれば、競技者にも修理の届かぬ爲の練習不足といふことが起つて参ります。であるから競技主催の方と競技者との間に問題が生ずることが、よくあります。

此處で私は競技主催者と、競技者とは、互に車の兩輪の如く相均衡した氣持で、理解と協商が常になければならないと云ひたいのであります。

ヘルセット中尉がやつて来て、實地指導をして初めてジャムプ競技の規定が、お判りになつた方が少くないと思ひます。ヘルセット中尉の實地指導をお受けになつた方は、シーズンに入るに當つて、もう一度あの當時の指導振りを呼び起してスキー聯盟の規定を御読み下さることを望みます。



## ジャムプ主催について

ジャムプ競技開催に當つては、先づ第一にジャムプ臺の主任を豫め決定して、そしてその主任は、全責任を以て大會に對する凡ての準備に力を注がねばなりません。従つてジャムプに對する該博の智識と經驗を有する人であることを必要と致します。

出來得るならばシーズンに入る前からその決定を見る必要があります。

つまりシーズンの前から土工なり、設備なりに加工を必要とする個所を檢分し、必要に應じては工事の着手に對する監督の任に當る必要があるからであります。

そしてシーズンがやつて來たならば、恰も自分の子供の養育に熱心である様に、熱と愛とを以て、ジャムプ場の管理に全力を傾注する程の犠牲的心掛けを必要と致します。

一と雪毎に、一回の新雪の來る度に、主催になる人は、斜面の踏みつけに従事する事を必要と致します。

特に使用せらるるジャムプ斜面で最も多く着陸するであらうと思はれる個所の前後一〇米は最も嚴重に踏みつけねばなりません。

大會當日の一人の不幸は、主任の責に來ることが少くありません。

そしてその踏みつけが充分であるならば、不十分に斜面が踏みつけられてある時に比して不幸の生ずることが、遙かに少いのであります。

尙又斜面が強く踏みつけられてある時は、不幸にして競技會の前日新なる降雪を見ても、前に踏みつけられてある處迄新雪を拂ひのけることによつて、僅かの時間で修理が届くことになり、

又餘り踏みつけ過ぎて、堅くなり過ぎた様な場合は、スキーの角付けなり、スコップなどで斜面に刻みをつけて適當に

軟かにすることが出来ます。

最も斜面の悪コンディションの場合は暖氣の爲に、降雨の後を受けて、加はり来る寒氣の爲に、斜面が凍結して終ふ場合であります。この様な状態は先年サン・モリーツツのオリンピッククの時に目撃しましたが、かゝる時は凍結斜面をスコップ等で打碎いて根本的に踏みつけをせねばいけません。

簡單に書き並べてもシーズンがやつて来てからのジャムプ主任の仕事は一通りの仕事ではありません。

然し斯程に注意を拂つて修理されて居るならば、決して斜面のことに心配することがいらなくなるでせう。人力を以て盡し得る凡べての力の外にある場合、即ち天運に恵まれざる時は、論外でなければなりません。

我が國では、未だジャムプが競技化してから日が浅いと申しましたが、已に〳〵拾年に近い日數を經過して居ります。そして相當に多くの實際的經驗者も各地に出来て来て居る様であります。さうした人達にもつと〳〵私は他の多くの人達にジャムプ競技を傳へる意味で、御研究、御奮勵あらんことを切望して止まないものであります。

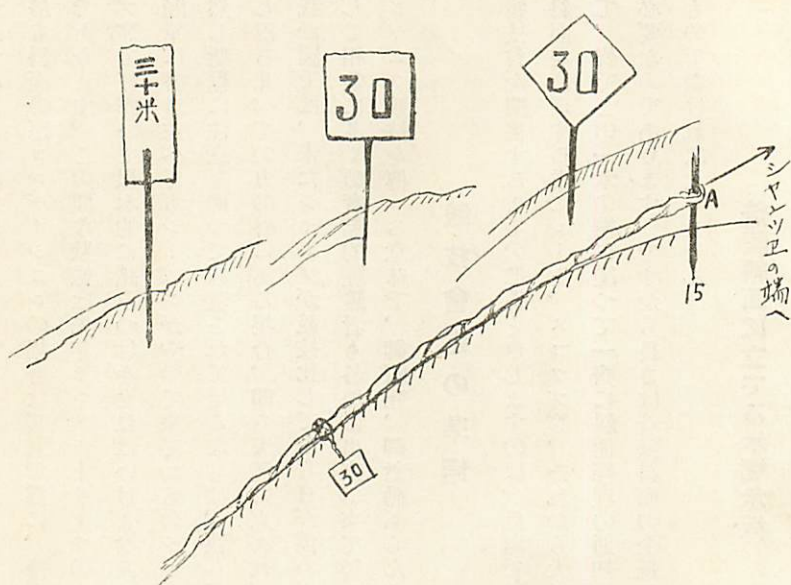
### 競技會迄の準備

競技會を開催するまでの準備と申しますのは、此處では道具の意味であります。先づどういふ道具を必要とするか。斜面を修理する爲にレーキ、スコップ等、それから太く相當に長い綱、これは特に着陸斜面にある斜面係がスキーを穿いて、皆でこの一本の綱に縋つて一齊に斜面修理の通知と同時に斜面の上方、下方同時に、斜面を踏みつける様にする爲に必要なのであります。ですから長さは着陸斜面の全長を必要とします。太さは一〇乃至一五人之に縋つても切れぬ程度のものでなければなりません。

### 着陸斜面に立てる米標示板

これは着陸斜面での距離が明瞭に記してあれば宜しいので板でも何でも適當の大きさのものであれば宜しいのでありま





す。(圖参照)

普通は圖一の様な木板又はブリキ板に米數字をペンキで書いて作つて居りますが。

私がオリムピックの歸りにノールウエーに参りましてホルメンコルンの大會の時に見たものは、圖二の様な王合に作つてあるものであります。

豫め飛臺の端から米數を測つて置いて、例 A の個所まで一五米とするとそこに一本のザイルを結んでそこから下方斜面にそのザイルを延ばして、そしてそのザイルに半米毎にブリキ板に米數を書いたものを細い紐で結んであるのであります。

卷尺は競技前豫め斜面計測が出来れば用意がなくなるとも濟みますが、念の爲競技當日も用意されねばなりません。

其他合圖の旗とか呼び笛とか又は喇叭とか、が必要であります。

又審判員の爲に審判表などは決して用意を忘れられてはならぬものであります。

競技場で特に着陸斜面は、見物人を危険の無い程度に並列させる様にすることが必要であります。

圏外は競技場のジャムブ斜面の規模の大、小によつて適当な巾と延長距離がなければならぬと思ひます。

此圏外で兎角見物人の押寄せの爲に不祥事が起され勝でありますから、此點は大いに主腦者は考慮して、豫め圏外に柵を設けることが必要であります。

觀覽席の設置個所については種々の場所に設置されたものを、私は先年のオリムピックで各地へ行つて見ましたが、最も良く作つてあると思ひましたのは、ホルメンコルンのものであります。 (挿圖参照)

觀覽席が出来ると、着陸斜面の整理は、甚だ好都合になります。

設備の一端として、飛距米數の標示板を設けることも必要なことでありませう。

ジャンツエの下をスキー置場、其他道具置場に使用することは、外國で私達は各地のジャムブ場で見ました。

矢筈しく云ふとジャンツエの端には、不斷練習を禁ずる場合に綱又は棒等で止めを刺して置く必要があります。

イタリーでは、着陸斜面の中途に大きな丸太を落ろして、着陸斜面の自由滑走を禁止して居りました。全く折角の修理を臺無しにするのは着陸斜面の自由滑走であります。如何にジャムブの選手に不便を與へるか知れないのであります。そしてその裏にジャムブの主任の泣く聲が聞かれるのであります。此處に一つのスキー道徳が生れて來ます。

### ジャムブ競技開催に際して

各係員は夫々部署に著くことになります。

召集係によつて競技参加者の呼集が行はれ、競技者は一應ジャムブ主任より、競技上の説明、例へば何回づゝ飛ぶとかスタート地點を何處に決定するかといふ様な説明を聞く必要があります。

委員會がスタートの地點を決定する様に國際ルールは規定致して居りますが、之はジャムブ競技に關する委員會があつて、その方で相談するもの様であります。



サンモリツツの時は、飛型委員とジャムプ係主任等が相談の上決定して居た様でありました。

各係員の職務として最も競技會當日常に注意を要するのは、斜面係であります。

斜面係は常に競技者に不便や不利のない様に勉めて斜面の状況に注意を拂ひ、且つ競技の進行を圓滑に敏速にする様に心掛けて居らねばなりません。

競技者が圏外線を突破して終つたなら直ちに着陸斜面の主任は着陸斜面の状況を素早く檢し、修理の必要なき時は、直ちに飛型員に用意整つたことを報告し、飛型委員は直ちにシャンツエ上の上方と、下方斜面の連絡をとる係員に、競技者出發の合圖を爲さしめるのであります。此合圖は一人が旗を振ると、すぐその横に居る係が喇叭を吹く、これはノールウエーでさうやつて居ることあります。此合圖があつたならばジャムプバアは必ず出發せねばなりません。

若しも必要によつて斜面を修理する必要ある時は斜面係主任の合圖によつて直ちに着陸斜面にあつて大綱に取つて居るスキーを穿いた人達は、直ちに斜面に出て一齊に斜面の踏み固めを最も敏速に致さねばなりません。

此間の修理時間は斜面係主任が適當にするのであります。そして斜面主任の合圖が再び有つたならば、一齊に踏みつけをして居た斜面係の人達は舊の位置に立ち歸る様に致します。

そして此斜面修理の間はシャンツエの中央に旗を立て、上方にある競技者に下方斜面目下修理中のことを報ずるのであります。

競技開始、進行中は常に着陸斜面にある飛距係は各自飛距記録用紙を手にし、各自飛距離を記入することを忘れてはならないのであります。別に飛型審判員に飛距を報告する必要を認めないのであります。

又係として圏外にある係は、最も敏速に穴埋め等の事に従はねばなりません。

競技者は常にスタート番號に注意し、且つシャンツエ上の合圖に意を拂ふて合圖があつたならば躊躇することなく直ちにスタートを切らねばならないのであります。

## 積雪期に於ける中級山岳（信州北部）

小 池 文 雄

こんな大きな題目を持ち出して、大方の諸賢に對して實に、潜越至極と思つてゐるが小さい考察をめぐらして見る事も悪い事では無いので敢て表記の様な題を掲げる様になつてしまひました。自分の過去に於ても、中級山岳の冬期

登山が山に對する味ひやデイスプリンの上に可成の役割を演じた事を思ふと、一種のなつかしみと、輕視出来ないあるファクターが含まれてゐる事に想到せずには居られないのだ。中級山岳に於ては三〇〇〇米以上の高山岳に於ける様な精神的緊張味、肉体的勞作の激甚を欠くとは云へ、尙償ふてあまりある安易な親しみの情感と、危険から解放された餘裕ある快悅に浸り得る獨自の世界がある。殊に既にオールドボーイとなつて、組織立ちたる學校の部を出で樂しき追懷の夢を過去のバートナシツプに注ぐ様になつて

は、各自のビジネススライクな都合もあり親しき山友達とも、行を共にする機會を段々失ひつゝある様になると、勢ひ僅かな休暇を利用しての單獨行を重ねる様に向ひ必然的に簡易な、中級山岳に足繁くなる様に思はれた。

一、先づ中級山岳の範圍と云ふか、或ひは其のデイフニシヨンと云ふか。之れは一寸困難な問題で容易に決定し難いと思はれるが、大体雪質、高度、根據地よりの距離等に依り推論を進めて行き度いと思ふ。

高度に由てクラシファイする事も非常に無謀ではあるが之れと氣温との關係よりすれば大過なき事と思ふ。限界的な斷定を下す意味では無いが、凡そ一八〇〇米内外の高度より二五〇〇米前後に位する山岳が此の部類に屬すのでは無からうかと思はれる。勿論寒氣甚だしき北海道邊の山々



になると更に異なるかも知れぬが、本州中部に於ては大體此の種の山が、夫々似通つた共通點を有して居る哉に思はれる。雪質から云ふなら此の種の山は概ねウインドクラストを形成し樹間、風蔭側に於て粉雪を持つてゐる。併し本州中部にても比較的低溫な信州地方の山岳に於ては雪が乾燥せる爲か、又は風壓強き爲めか一三〇〇米前後の山に於てさへ冬期常にクラストを、其れが特に堅厚な凍雪（風に由りて）の状態を持ち續ける所さへ見出さるゝのである。故に雪質より判定を下すときは一三〇〇米前後の山も中級山岳に入れらるべき疑念を備へて來る。

高山岳に於ても槍ヶ岳や乗鞍岳の様に冬期使用出来る小屋より頂上まで幾何も無い個所もあれば、又其れと反對に中級山岳でも人里或ひは根據の小屋より數里を隔つる故に冬期末登高の山さへもある。否寧ろ人に顧みられざる藪山で夏は誰も訪ふものもなく、冬期良好なシーゲレンデと化する多くの山々を見るのである。之れに由つて觀ると中級山岳なりとも其の困難の程度が必ずしも高山岳に劣る譯のものでもなく、人里を離るゝ數里の山に登高を企てんとせば高山岳に行くより更に多くの、科學的計畫及判斷、或は

肉体的勞作を要求するのである。從て單に高度に由る判別は困難となつて來る。併し又他面根據地より其の目ざす山嶺迄の正味登高度に由ても難易の輕重がある。二四〇〇米内外の山でも正味登高度が一〇〇〇米を出でぬ事もあれば一三〇〇米内外の低山岳でも小屋無きため人里より一〇〇〇米以上の登高をせねばならぬ事もあるであらう。即ち其の山が孤立か否かに依て其の正味登高度に差異を生ずる。

併し通觀するに、二五〇〇米——一八〇〇米範圍の山は多少の無理を忍べば途中に露營する事なしに日歸りが出来るものが過半を占むるであらう。

一、中級山岳の積雪状態は地方に由て大差ある事と思ふが少きは二三尺、多きは二三丈にも及ぶであらう。山膚が直接風に暴露させる個所に於ては多くはクラストを形成す東、北兩斜面に於ては雪は翌春迄粉雪を持ち續くるを常とする。積雪量多き信越國境地方に於ては、十二月、一月の兩月は雪落着かず、スキ一の埋る事、時に腰に及び行動難澁を極むる事多し。但し右の地方に於ても標高二〇〇〇米を越ゆるに到り風壓のため雪締り、さして行動に不便を感じせず、寧ろ二四〇〇附近に於ては多くはスキ一の使用を許

さざる場合多し。或は積雪量適度乾粉雪の山に於ては十二月一月中と雖もスキ一の徘徊に好適なる所あり。所に由りては十二月、一月はブツシユ未だ埋らずスキー道遙に不適なるも、三月に到れば何れの場所もコンデイション良く、雪締り絶好のゲレンデとなる個所多し。

之れは早春、初夏山を歩いて見た事であるが雪にじかれた雑木、枯草の繁き路傍に、時には三四尺の高さに或ひは七八尺の高さに、若芽を恰も鎌で刈り取つた様子の跡を見る事だが、之れは冬期雪上に出てゐる木の芽先を兎が噛み切りたるもので、之れに由つて旅行地の冬期の積雪量の大体を知る事が出来ると思ふ。

一、中級山岳の危険性の程度に到りてはハイアルプスの其れと大分趣きが違ふ様である。天候の變化も大分前者のそれと緩急の差がある様である。先年十二月卅一日鹿島槍ヶ岳登攀の際、午後二時頃であつたが布引の尾根に出た際は天気快晴であつたのが僅々二三分の間に東方の淺間が薄く煙るよと見る間に南の穂高、槍の尖峰を掠め飛ぶ暗灰色の雲に天候激變の兆があらはれ鎌尾根（鹿島の部落人は乗鞍と呼ぶ）を南に下る頃は面をあける事さへ出来なくな

つたのを感じてゐる。

然るに二三〇〇米級の山では氣象惡化の兆ありて後や、餘裕ある様に思はるゝのであつた。吹雪に見舞はれた時の危険性も大差は無いとは云へ二六〇〇米以上の尾根に於て吹きさらしに遭つては刻々に押迫る危険の豫感と人間の微力を浸々味はせらるゝ許りだ。

崩雪の危険の程度は、兩者に於て多大の差異がある様だ之れは勿論積雪量と至大な關係を持つ事と思はれるが、吾々の場合は傾斜面の角度も、特殊な場所を除くと概してハイアルプスの夫に比して弱く、斜面の廣狹の程度も勿論異なる様だ。ハイアルプスに於ては冬期、春期の何れを問はず絶えず崩雪の危険に脅かさるゝに反し中級山岳に於ては主として春期に右の危険が集中さるゝ様に思はれる。勿論種々なる例外を伴ふ事を信するが、他の地方の事情は餘り知らぬが信州に於ては北アルプスの如き毎度多量の積雪を見る所に於ては乾燥新雪雪崩の危険が特に冬期に多いやに思はれる。妙高の如きはミユドルクラスの山としては崩雪の多い方であらう、戸隠西岳の南斜面も著名の危険區域たるを失はない。併し大体に於て、ハイアルプスに比すると



餘程雪崩の落つる、又夫に出遭するプロバビリティーは少ないものと思つて差支ないと思はれる。其の他高山岳に於ける場合の如く一步の誤りが致命的の、アクシデントを惹き起す如き危険性は薄いが却つて、山を容易く思ひなす事より來る種々な間違ひ、負傷等は寧ろ低山岳に多い故爲は精神的緊張味の多少に由る事か。迷路のトラブルは相當に注意を向けられねばならぬ様に思はれる。先年笠ヶ岳登山の際歸路熊の湯より單獨下降の途中濃霧のため幕岩東方一〇〇〇米の山中に於て方向を失しコンパスに由て漸く進路を定め得た事もあり、其の時始めてコンパスの眞價に感謝した様な始末であつた。

一、中級山岳に利用さるゝスキータクニック、特に信州地方の如き急斜多き場所に於てはアルルベルグテヒニック。其の大部は殆んどダウンヒルステシニングターンと云つても過言では無からう。之れにウツドラニンングの完全なるマスター。最後に當地方に最も必要に迫らるゝは其の小巖多き山勢の然らしむる所以か、サイドスリッピンングのフォアワード、バックワード、殊に複雑なる地形、積雪量少きブツシユ多き山地に於てはブツシユクラフトに長ずるか否か

に由て其の日の行旅の進捗に多大の差異があると思ふ。アイステクニックは殆んど用ふるに處なしとも云はれやう。一、定義的範圍に於ての用具

之れは云ふまでも無く普通の一通りの山道具の完備を以て其の理想としたいが併し特殊なものは之れを欠くも登山遂行上、さしたる不都合を生ぜぬと見てよからう。ザイルは殆んど要るまいし。二〇〇〇米級ならば時にはアイスピツケル、カンデキを欠くも尙能く行を遂げ得る場合も多い但し季節に依りては、十一、十二月頃は未だ積雪量少くスキーを用ふるに足らず、さりとて徒歩で漕ぐも困難なる場合は登山を一義的に考へる場合に限り輪カンジキの携帶を念慮に入れ度い。

又四、五月頃の照り映ゆる日の下に引き締つた春の雪の上を、夏スキーもて滑り歩く快味は、神巖な冬山の趣きと又は自ら別な味ひのあるものであらう。最後に簡單な、時季、所要時間、雪質状態、特記事項を雜然羅列して前編の参考にして擱筆する。

三方山 昭和二年一月三日、山の湯より二時間半、標高二一〇米、雪質クラスト、積雪四尺一五尺（單獨行）

烏帽子岳（二〇六五・六米） 湯の丸山（二一〇五米） 昭

和二年一月二日、山の湯より地藏峠を経て烏帽子に到り三時間半それより湯の丸山に到るに一時間半、烏帽子の東面に於ては凍雪と、樹氷の吹き溜りの交錯せる所あり湯の丸に於ては波状の堅きウインドクラスト。

高妻山（二三五二・八米）（單獨行）昭和四年三月十日、

長野縣上水内郡柏原村信濃電氣株式會社鳥居川第三發電所を根據とす。貯水池番小屋を経て佐渡山と五地藏との西の鞍部に到り五地藏の尾根に取り付く。前々夜降雨あり其の上に若干降雪ありしたためカツテ利かずビルゲリー鐵の必要を感ず。おまげにカンデキ持參せず、約百米許り二度滑落す。發電所より約三時間を費して五地藏東寄の一七五〇米邊まで登りしも、身体のコンデイション悪く、用具無きたため引き返す。雪質、潤濕スキーに附着す。十二時發電所着、二時柏原驛―歸宅。

黒姫山（二〇五三・四米）（單獨行） 昭和三年十二月廿

三日、柏原村一杯茶屋を根據とす。午前七時發、一三二・三米標高の東側の澤に沿ふて登り一五〇〇米附近より散岩の印ある尾根を登る、十二時頂上着。九〇〇米―一五

〇〇米邊まで雪軟くスキー埋り勞多し。一八〇〇米より上、クラスト。午前十一時半頃より天候悪化の兆あり。白馬杓子は午前十時頃既に雪雲に被はるゝを見たり。三時柏原驛―歸宅。

飯綱山（一九一七・四米）（同行二人）昭和三年三月十

五日、飯綱原炭酸泉を出發す。主峰より鳴岩に到る尾根を登る。曇り小雪、三時間を費し午前十時主峰（一九一七・四）着、十時半神社のある峰着、拜殿の中にもぐり込み晝飯す。氣温攝氏<sup>3</sup>、前夜より降雪あり多少吹雪く。山の西半は暗れ東半は雪雲に蔽はる。雪は一五〇〇米以下は濕潤新雪、一七〇〇米以上粉雪、一八〇〇米附近の黒膚の近くでは新雪雪崩の危険を直觀的に感じた。峰は大なる雪庇をなす。十二時半頂上發二時炭酸泉着。

靈仙山（一八七一米）（單獨行） 昭和四年三月三日、

炭酸泉發、四時間を費して靈仙山の東南尾根を登る。雪質一七〇〇米より上は輕きクラスト。十二時頂上發、鐵鑛泉を経て炭酸泉着。此の山は頂上より一二〇〇米附近まで草一本も無く絶好のゲレンデ、但し稍や急斜。

妙高山（二四四五・九）（單獨行） 昭和三年十一月廿五



日午前九時燕温泉發、朝霧小雨あり其のため出發遅る。

十時光明照明の瀧、硫黄探掘所より先、前山の肩に出づる迄僅かの間軟粉雪に難澁す。スキーも輪カンデキも無し。光善寺池の所十二時、昨夜の雪は消えたれど數日前の舊雪ありて、頂上迄約二時間夏路の通りに膝位のもぐる雪を漕ぎ大いに疲勞す。二時頂上着、一四〇〇米より上は雲上に出で遠く日光白根の方面、西は北アルプスを越して劍、立山迄見える。眞砂の肩が青氷に光つて見えた。火打、燒、此所より雪は多い。四時燕温泉着、七時關山驛。

笠ヶ岳（二〇七五・八米）

昭和三年四月二日午前七時熊

ノ湯發、館主同行、九時笠ヶ岳頂上着、雪質濕潤新雪、小雪氣温高く眺望利かず。

奈良山（一六三九・四米）

昭和三年十二月十七日午前八

時半須坂發（單獨行）豊岡村上原より澤傳ひに紫襪荻に到る峠に出で午後二時頂上着、氣温低し積雪一二〇〇米より上方一尺餘ブツシユ多し。スキー、輪カンデキ携帯せず。豊岡牧場小屋を冬期使用せば土鍋、破風岳に興味あるワンデルングを試み得べし。

四阿山（二三三二・九米） 主峰は二三五〇米を出でん。

三角點のある個所は主頂より二〇〇米許り東方の肩なり昭和二年一月五日午前七時菅平東組發（單獨行）大明神澤の三ツの小澤の落合を越し更に一ツの大きな澤を越し幅廣の牧柵の土壘の尾根に傍ふて登る。所々岩石露はる十一時頂上着無風なり。一八〇〇—二二〇〇米邊融解を繰り返したるクラスト、二一〇〇米の肩より上波狀の凍雪（風の作用）同年四月十八日更に登りし際ルートは澤傳ひに登りしに、四月と云ふに粉雪に出遭したり。降路兩回とも登路を下る。

猫岳（二一九五米）

昭和三年一月十五日、同行二人、

菅平東組午前八時發、天氣快晴。一八五〇米の澤の二股をスキーデボットとす。アイゼンを付ける。之れより上は一尺もある階段狀の堅いウインドクラスト、頂上風強し雪を卷く。十一時半頂上着、歸路二股より三本松に到る澤の風蔭側を滑降、滑度の異なる種々なる雪に遭遇すウインドスエプトスノウは餅の様に重苦しく之れに突入した時の氣持が實に悪かつた。

之等を通觀すると少くも同一地方に於ては、雪質其他に於

て或る共通點が見出せる様に思はれる。

又適當な計畫の下に遂行される冬期スキー登山の一日の行程は四〇籽—一五籽の範圍、垂直登高度一〇〇〇米乃至一五〇〇米。其の日の垂直登高度大ならば行程に於て短縮するか、垂直登高度少き時は長き行程を持ち得る等、距離



と登高度との相互關係が。兩者の間に脈絡してゐるはしまいか。實際に於ても、各地の山小屋と、頂上との高度差、山小屋と麓の村落との距離、登高度が、其を暗示してゐる様に思はれてならない。

(一九二九・二二五)



「一九二八年 *Alai-Pamir* 遠征日誌」より (1)

W. R. Rickmers

古 山 甲 二抄 譯

五月十日

ベルリン發

五月十一日

汽船「Preutzen」にて Seutin を發す。

Finsterwalden Biersack, Nöhl, Borehens, Mien, Allwein,

Schneider, Kohlhaupt, Rehnig と行を共にす。Lenz は一

足先に既に Tschkent に到着してゐる。

五月十四日

レニーゲラード著。Akademiker Feisman と埠頭にて面

會す。ベルリン在住のソビエツト大使からの添書があるの

で税關では寛大に取扱つて呉れた。翌日は居留地の許可、

關稅附帶荷物の検査や身体検査で一日暮らす。十六日には

理科大學の歡迎會に出席す。此處で私は自分達の計畫を説

明して聽かせた。聽衆に好感を與へた。總長の Karinski  
氏が吾々に對して挨拶され、又滿場の援助者達からも挨拶  
があつた。Schlechterakoff はその答禮で特に忙がしく少し  
の暇もない程だつた。

土地の地質學者、地形學者、醫者等が彼等の専門の間を  
持つて我等をよく訪問した。Bejajeff 氏夫妻の紹介で來た  
る所の Ternwarie Pulkowo 氏の應答は就中愉快であつた。

此の地で吾等が伴侶たる若きユダヤ婦人 Juri Jasnewitsch  
を教へ込む事が出來た。

五月十九日

モスコーに向けて出發。

五月二十日

早朝モスコー到着。我等を統御する「機械」は、我等を

Bolschaja Moskowskaja 旅館に連れて行つた。そこで私を「學者館」に案内して、私はそこに又二、三の同行者を拾つたのである。主として其處にゐる人は Kinolente であるが、その内に Lew Abramowitsch Perlin を相識つたのである。美味しいロシア式の晝食を終へて一寸散歩の後「Paniより」と「Swanetian より」の寫眞を見せられた。寫眞の後、國民代表會議の執行委員長の Nikolai Petrowitsch Gorbunoff 氏が出て來て吾等の計畫を明白ならしめた。八月の始めに Koktschar にて吾等と會する事を決心した。それで又尙ほも種々の御馳走があつた。此の席上には Prokhor Krylenko 氏も居た。

五月二十一日

午後 Meschabjornutz——寫眞街——の人となる。Gorbunoff 氏が Almi 遠征の同志の人々と協議する許可を與へられた處である。後刻に獨逸大使宛に非常なる満足の結果が齎された。

五月二十二日

レニンの墓に詣で、クレム宮殿と赤軍兵營を見學した。夜 Tashkent に手紙を出す。Gorfnoff 氏は別れの挨拶のた

めに我等を訪問した。同氏の盡力によつて無代價にて馬車を Andeschan より Kurasa まで仕立てゝ貰つた。

Schischerbakoff は荷物を馬車に積み込む爲めに Petersburg に行つた。そして我等とは六日後に Tashkent で落ち合ふ手筈になつてゐる。吾等の計畫は充分に根を張つたのである。ユダヤ婦人と Perlin は私と共に行く様になり吾等一行はもう三十名に達した。糞尿と Tereken (木質の根を有する一種の芸香) が斯く多数の人々に對してはびこらない様に Karakul と Koktschar に丸太小屋を建設せねばならぬ。又先發隊は平坦なる南ロシアを汽車で私の處にやつて來た。

五月二十七日

早朝 Tashkent に到着す。市營旅館の五號室に落着た。Lenz と面會した。Lenz は大學の物理學研究室に住居してゐた。その土地の酪農業製品を食事に供する吾々にとりては食事の時間が頗る大切である。此處では凝乳入りの菓子とクリームを掛けた苺を食ふ事が出來た。物理學研究室の Slatowratski 教授、中央アジア氣象學研究室の Korshewsky 教授並に Krarnaler 教授、氣象學者 Zimmernann



氏（氏は U.D.S.S.R. 社の Usbekistan の代表者であり、陸軍の経理部の人である）等の人々の援助を受けて、立派な鞍五十組と五張の天幕を *Oschi* に發送する事が出来た。

五月二十九日

夜 *Nich* とユダヤ婦人を連れて *Oschi* に出發する。Leniz は *Isbara* に行き、他の人々は *Sumarkand* を訪問に行つた。*Mari* の山々には未だ澤山の雪が積つてゐるのが見える。夕方に *Andischan* に到着す。此の行進は *Karasi* が遠いので行けなかつたから、大型自動車を借りて此處へやつて來た。六十軒の道を走らせて八十ルーブルとられた。

五月三十日

夕方 *Oschi* 着、暫時 *Scheridanoko* の家族と住む事にする。

五月三十一日

庭を見ると吾等の荷物が高く積んである。整理しなくてはならない荷物だ。廣いローンの彼方に戸が開いてゐる小屋が見える。鞍も天幕も到着してゐる。馬車が来るまで吾等は五張の天幕を張らなければならなかつた。此の天幕の中には十五組のベットがあるがそれは病院が吾等に貸して呉れたものである。

*Suleiman Machmetowitch* 氏—工業學校の機械科主任であり鑛山技師である—は吾等をいろいろ援けて呉れたが吾等が大きな荷物がなかつたので氣の毒であつた。

*Schischerbakoff* 氏からは何の消息もない。それに反して *Judin* の弟が *Narin* から馬で此處にやつて來た。（廿六日到着）

最う十人の労働者を集め得た。此から吾々と行動を共にするのであるが、その内十五人よりなる一隊では監督者の指揮の下にもう作業をしてゐる。

六月一日

駄馬やその他に就ての商議、普通の馬一頭に付いて飼料付の貸賃が二ルーブルである。だが吾々は一人當り一ルーブルかゝる人々を養つて行かねばならぬ。であるから五十頭の馬を持つてゐるか、又は小さい馬でもいゝから澤山さへ馬を持つてると金持になれるわけだ。此の商賣は働く事などよりもズツといゝ商賣だ。その理由は、我等の隊員が—三十頭の馬はもう此の時借りてゐた—一二ヶ月の賃金を即ち六千ルーブルの金を前金で拂つてあるからである。馬を買つたのは吾等だが、然し所有權は未だ彼等のものだ。



□ 大 雪 山 □

武野 穀 一 郎



馬はやはり彼等のだ。一同頗る吃驚いた。此等の馬は取引もいゝが又よく働く。約束をとりきめる時次の事を云ふた。

少くも二十五籽を毎日歩く事と一頭に付いて十封度宛の大麥をよこす事を求めた。今日馬車一臺の大麥（千ブードある。一ブードが二・六〇ルーブルの割合だから全体で二千六百ルーブル）を買ひ、仲間の中の他の者が *Karkul* に發送した。その代金は馬の持主達に拂はせた。

で私が計算して見ると五十頭の駄馬が五ヶ月で一万五千ルーブルとなり、それに三十人（歐洲人と人夫）の食費等が一日三十ルーブルとして五ヶ月で五千ルーブル、それに五十人の運搬人夫の費用が各一人宛一ルーブルとして二ヶ月で三千ルーブル、それに雜費と本國での準備に合はせて私の隊の分は一万五千ルーブルだから全部通計すると三万八千ルーブルになる。大學から貰つた三万ルーブルの内三百ルーブル（*Триста*）で馬を買ふ時の豫備金）を差引いた二万七千ルーブルを今持つてゐる。それに貯金が二万二千ルーブルあり、臨時費として一万五千ルーブル即ち三万マール計上してあり、その中には突發事件の豫備金も含まれてゐる。恐らく歸省する時も此の中から正當に旅費を支出

して歸れる事と思はれる。

*Kozhenewsky* は *Tanina* 地方は夏は曇が永く續くと主張した。それだとして私達の豫定を變更する事は出来ぬ。何故つてその天候がアルプスよりも悪いとしても此は我々が左右できないからである。且又、早朝は天氣は晴れてゐるものである。又、登山の最適期は九月から十月であると、*Kozhenewsky* は云ふ。我等の豫定はその通りである。*Kozhenewsky* までは極く平凡の路である。それから少し險阻になりて、*Tanina* から氷河の舌先までの谷は水が一杯である。

馬や吾等一行に關してはロシヤが遺憾なく注意して呉れた。*Tulin* 老人は非の打ち所なく忠實なる助手であり召使であつた。商賣その他の事は皆やつて呉れた。しかも上々の首尾であつた。

此處までは私はホット安心した。が只大荷物が未だ到着しない事が私の心を亂し、又時間を空費させた。最初の三週間は準備に費してしまつた。

三十三頭の馬が *Tanina* より到着——*Karkul* には *Tulin* の父親が住居してゐる——此の若きユダヤ婦人中には三人

の下女がある。此等の馬は只十四日訓練しただけなそうだが荷物はある税関の問題のために未だに *Leiningrad* に保管されてゐる。然しながら *Schscherbakoff* は五十六日頃迄に急行で出發しなければならぬ。若しも彼が十五日頃までも彼地に滞在する様になれば吾等は二十日まで延期しなくてはならない。猶豫は十日だ。若しそんな事がなければ全てが順調に進むのである。皆と種々相談した。 *Fanzow* は情深い奴だ。丁度 *Andriehan* (*Wasagar*) の外國の代理公使の様、軍人の様だ。

六月十四日

荷物が *Karasin* に到着したとの噂が廣まつた。

六月十六日

○*スミ*の人々が吾が隊を親切に待遇して呉れたので、その御禮に町の主だつた人々や官廳の役人方を晚餐會に招待した。灯とチヨコレート。

六月十八日

荷物百箱を騾駄にて先に *Karakul* に送らぬ。

六月十九日

○*スミ*と *Kurman* とは三時間で往來の出来る近い處だ。

六月二十日

出發におくれて馬で驅ける。だから唯の二十分で *Karakul* の谷川の川口まで來た。此處は *Tschirshank* の道を半分程來た所である。此處まで千六百米。

六月二十一日

五時半に寒暖計は丁度八・五度を示してゐる。七時から九時十五分までかゝつて *Tschirshank* の道を行く。道の向側が丁度二千二百米の所で吾等の今日の宿る處である。そこに二時半に到着す。馬の飼料に缺乏する。又食料も少し。 *Ginscha* を去る五軒の地點に宿る。本日の騎行したのは正味五時間である。

六月廿二日

朝から曇つてゐる。ポツ／＼雨が降る。今日は一日休息する。馬の飼料に大麥を *Gulshcha* から取寄せなければならぬ。

六月廿三日

三時半 *Kisi-Kurman* に向ふ。荒寥たるカラバン(隊商)の赫土色の宿營。午後一時半 *Kisi-Kurman* を出發して、今日の宿所に二時半に到着す。高度千七百米、此の邊は人跡



未踏の地である。

#### 六月廿四日

六時半の時十四度なり。六時四十五分出發。Sulturgumの Miltirposten には十時に到着す。谷は未だ長々と續き貧弱だ。此等は皆 *Alpi* 或は高山の *Kirgizen* である。八軒もの遠い所に羊肉を迎に遣らなければならなかつた。だから河口の低い段丘の宿營點まで尙一時間四十五分の間一同を勵ました。そこは藪であつた。馬の爲めに素的な草原があればいゝが。

#### 六月廿五日

宿所を六時四十五分に出發。九時四十五分に *Kul-Bata* の狭谷にさしかゝつた。高度約二千五百米。一時半龍膽生しける原の真中にある *Olin-Lug* の野に到達した。

#### 六月廿六日

今朝はよく晴れてゐる。九時半出發。Taldik に十一時半着。それからして二重になつて狭谷を過ぎつて *Alai* の廣い谷の中にある *Sarlasch* に向つて進む。無数の家畜が放牧されてゐるのを見る。午後一時四十五分 *Sarlasch* に到着。此處で路が *Ikescham*, *Pamir*, *Karategin* に岐れてゐる。

る。此處に宿營してゐた *Nöth* と *Korschenevsky* に會ふ。

*Borcher* の馬と *Schneider* の馬が、*Olin-Lug* の方に逃げてしまつた。しかし、間もなく二匹共歸つて來たので、*Dzhim* の險阻を越えるに役立つた。此處にては吾等は駱駄の背により隊商の様になつて此の砂原を越えた。遠征隊一行は六十五名の隊員、馬百六十頭、駱駄六十頭に増加した。此の増加は *Karakum* に於て先づ最初に解決しなくてはならない問題である。此處に三日間休息して整理をなし、三十日に、*Kankul* に出發する事に決心した。

#### 六月廿七日

晴れたるも霧深し。*Borchers* と *Ten* は北に聳えてる山に岩攀りに出掛ける。

*Biersack* と *Finstewalder* とは雄大な *Bordaba-Moränen* に向つた。*Nöth* は *Schneider* と *Korschenevsky* を伴つて *Lenin* の峰の下の *Snok-tur* の谷（此でない別の處だとも云はれてゐるが）へ氷河を探險に行く。*Reinle* は詩を研究してゐる。

#### 六月廿八日

晴れ。霧模様  
珍らしくも三角形の *Kurumdi* の頂上が見える。

六月廿九日

午後八時頃から翌朝の七時頃まで相当雨が降った。水流極めて早し。忘れてゐた天幕の圍りの濠は幸にもあまりその必要はなかつた。午前中降らなかつたが午後に驟雨到る

六月三十日

最後の夜も雨が降った。元來が少い此のバミールの降水

は此の一週間に皆集つて降つたかの様である。長い間泊つた宿所を片づける。十二時に Saitasch を出發して Bordala 指して行程四時間にして、午後四時 Bordala に到着す。約三千二百米。(續く)

#### ◆ 寫眞について

アルプス連峰のマツターホルンの寫眞は、北大スキー部長大野先生の部屋に飾つてある寫眞をお願いして拜借しました。之れは松方さんから横さんに贈られたものを更に大野先生に贈られた先生秘藏の寫眞であります。横さんの説明には「ツイナルロートホルンよりオーバーガーベルホルン、ダンブランシユ及びマツターホルンを望む」とあります。

大雪山のは、北大スキー部の武野毅一郎氏が一九二九年七月十日の撮影です。



# 雜 錄

## ◎寄贈並新着圖書

スキー年鑑(1929—1930)

全日本スキー聯盟

全日本スキー聯盟規定(1929—1930)

同 上

山と旅(スキー準備號)十二月號

ジャパンキャンピングクラブ

ペデスツリアン十二月號

神戸徒歩會

R. C. C. 報告 III

ロツタ・クライミング俱樂部

山 岳 第二十四年第一號

大日本山岳會

## 「山とスキー」のバックナンバー

唯今左の號數の殘本を所持して居ます。御希望の方には喜んで御願致します。

第一年目(一號—一五號) 一二號—一五號

第二年目(一六號—二六號) 一八號—二六號

第三年目(二七號—三七號) 三五號

第四年目(三八號—四九號) 三九號—四九號

第五年目(五〇號—六〇號) 五一號—五三號、五五號

第六年目(六一號—七二號) 六一號—六四號、六七號—七二號

第七年目(七三號—八三號) 七三號—八三號

第八年目(八四號—九四號) 八三號—九四號

## ◆北大スキー部の光榮

スポーツの宮様として仰ぐ秩父の宮さまのお思召しによつて建てられた空沼のヒユツテは、昨春高松の宮さまが親しく訪れ遊ばして、空沼小屋と御命名になり、その使用管理を北大スキー部にお任せになりましたが更に九月下旬高松の宮さまは、北大スキー部へ空沼小屋の備品として左の品々を御下賜になつた。これはひとり北大スキー部のみならず今後この小屋を訪るゝ人々凡てがこの光榮に浴する譯で誠に有難いきはみである。

- |              |                |
|--------------|----------------|
| 一、ラクダ毛布 二十枚  | 一、裁縫箱(附屬品付) 壹個 |
| 一、焜爐及附屬品 壹組  | 一、晴 雨 計 壹個     |
| 一、銅製御飯蒸 壹個   | 一、鉦 各種 各種      |
| 一、アルミニウム製釜壹個 | 一、魚 燒 貳個       |
| 一、萬 力 壹個     | 一、米 櫃 貳個       |

- 一、焼 印 壹個 一、帽子掛金具 百個
- 一、護 謨 印 壹個 一、茶 碗二十四個
- 一、硯箱(附屬品付) 壹個

### ◆大倉男爵叙勲

札幌に住んで居る吾々に取つて、近く竣工したシャンツエ並に本夏竣工さるゝ秩父の宮様のシャンツエの建設者として感謝されつゝあつた大倉男爵は今回ノールウエー國皇帝陛下よりサン・オラフ勳章(La Croix de Commandeur de l'Ine Classe de l'Ordre Royal de St. Olav)を贈與せらるゝことゝなつた。之は、オラーフ・ヘルセツト中尉、オウレ・コルテルード氏、ヨオン・スネルスルード氏の三世ノールウエースキー選手を我國に招聘して、日本スキー界に偉大な貢献をされた男爵に對するノールウエー國皇帝陛下の御心からの御答禮と、一方又國際親善と云ふ深い意味に拜察されますが、之は男爵の名譽ばかりなく我國のスキー界のこの上もない名譽であります。謹んで祝意を表します。

### ◆北海道スキー選手權大會

昭和五年一月二十五日(土)同二十六日(日)札幌市郊外三角山附近に於て開催の北海道山岳會主催の第七回全北海道スキー選手權大會兼第八回全日本スキー選手權大會北海道豫選會の競技順序は左の如し。

- 第一日午前九時 五十軒(デイスタンスレース)
- 午後一時 十八軒(デイスタンスレース及複合競技デイスタンスレース)
- 第二日午前九時 ジャムブ(普通ジャムブ及複合競技ジャムブ)
- 午後一時 リレーレース(三十二軒)
- 午後四時 閉會式

### ◆スキージャムビングに就て

本會で發行した本邦に於ける唯一のスキージャムビングの純粹の研究的文献であつた廣田氏の著書スキージャムビングは既に絶版になつてゐるが、オリムピックススキー大會後夏にノールウエースキー選手の來朝によりスキー技の上にも初版を大増訂するの必要に迫られてゐるが、何分著者



は醫家としての研究と日々患者に接して多忙を極めてゐる處からその運びに至らなかつたのを、本誌の讀者其他から再々希望があつたので、初版に急ぎ大増訂を行ひ一月中旬頃本會から出版の豫定で目下その準備を急いでゐる。

今回の改訂版は、著者が昨春サン・モリーツツに於いて開催の國際オリムピックスキー大會に於ける世界的選手の活躍振りをまのあたり見、更にスキー王國ノールウエーに渡りホルメンコルンの競技に参加して親しく見聞せるスキー技と、その體驗とに基き、加ふるに本春來朝のノールウエーの三選手に従ひ各地を旅行の際に得たる好箇の資料と著者の思ふ處を記し之に配するに彼地より持ち歸りたる多くの寫眞を挿入して、スキージャムピング研究者の参考に供しようとするのである。發行の曉は御愛讀を希望します尙、本書は、實費を以て提供すると云ふ本會の趣旨から經費の都合で限定版にしました。御手数數でも御希望の方は早く本會へ申込んでいただきます。(寛)

### ◆スキー講演集刊行

本會は一月下旬山とスキー講演集を刊行致します。内容

は次の通りです。御愛讀を希望いたします。

#### 山とスキー講演集目次

スキー民衆化と其の施設

北大教授スキー部長 大野精七

スキー家の心得置くべき衛生

北大教授 柳 壯 一

初歩のスキー術

北大スキー部出身 南波初太郎

スキー材の選び方

北海道廳林務課長 林 常 夫

ゲレンデスキー術について

小樽高商教授 高橋次郎

スキー競技に進む人達へ

廣田戸七郎

デイスタンスレーズの練習法

オリンピック主將 高橋 昂

ジャムプの練習法と複合競技の要領

北大スキー部出身 村 本 金 彌

ドイツに於けるアマチュアスキー

北大教授 酒 井 隆 吉

諾威スキー選手を案内しての感想

廣田戸七郎

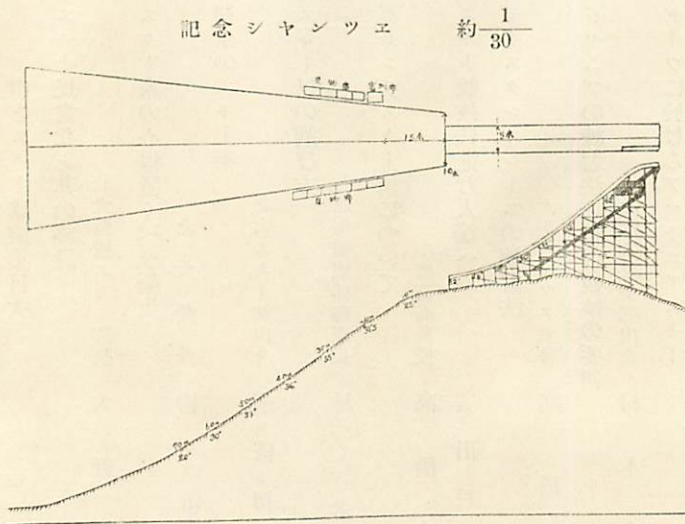
### ◆記念シャンツエ落成

スキーの札幌に世界に誇り得るジャムプ臺を建設すべく昨年春、スキー王国ノルウェーより雪の三超人を招いてグランド二箇所を決定し、設計圖もヘルセット中尉に依頼してあつたが、過日ノルウェーからかしくも高松宮殿下御來札の折ジャムプを御臺覽遊された荒井山の分の設計圖の送付があつたので大倉組では早速琴似村の高橋仁氏に請負はせ舊蠟十五日立派に工事完成し、一月十二日札幌スキー聯盟主催のもとにそのシャンツエ開きを盛大に舉行した。

このシャンツエは東南向きアブローチは全部木材横にて五十米突シャンツエの高さ二米突、巾は五米突にてブラツトホーム五米突は十二度にて五米突おきに十六度、二十度二十九度、三十七度と傾斜しアブローチ三十米突の部分より上段に出る事の出来るやうに階段がつくられる。アブローチの上段は二米と五米の廣さと成つて充分スキーを履く事が出来る。又着陸斜面はのりいコンベックスに始まり十六米突の部分より三十度の傾斜を成し三十米突より三

十六度に五十米突まで續きランディング、バーンの最大傾斜面をなしてゐる。ランディングバーンの巾も相當廣く美しく

延びて二百米突位續いてゐる。



20. Dez. 1929



審判臺も西側にシャンチェより二十米附近に出来て、このシャンチェの特長としては十五人收容の箱形のスタンドが西側に四ヶ、東側に六ヶ作られてある。此の材料は、スキー界には由緒深い北大のジルバーシャンツエのアツプロイチの槽を解体してあてゝあるが觀覽スタンドのあるシャンツエは之れが本邦の嚆矢である。飛距離も、ランドングバーンの三十六度の部分三十米突より四十五米突の間であらう。着陸斜面が丁度兩側に小さい丘陵を持つてゐて風除けと成つてゐる。圖は記念シャンツエのプロフキルとプランである。(北海タイムスより)

シャンツエ開きの模様は次號に書くことにする。

### ◆札幌スキー聯盟組織成る

北大スキー部、若老會、札商、拓銀、樞松、大丈夫會の六團體の發起にて、札幌市内三十四スキー團體を以つてスキー聯盟を組織することになり聯盟規約を作り會長に札幌市長を擧げて舊臘七日札幌市公會堂に於て盛大な發會式をあげた、聯盟規約は左の通りである。

### 札幌スキー聯盟規約

#### 第一章 名 稱

第一條 本聯盟ハ札幌スキー聯盟ト稱ス

#### 第二章 目 的

第二條 本聯盟ハ札幌ニ存立スル各スキー團體相互間ノ統一親和ヲ圖リ併セテ該技ノ進歩發達及ビ其ノ普及ヲ圖ルヲ以テ目的トス

#### 第三章 組 織

第三條 本聯盟ハ札幌ニ存立スルスキー團體ヲ以テ組織ス

第四條 聯盟本部 札幌市役所

#### 第四章 役 員

第五條 會長一名(市長推戴)會長ハ本聯盟ヲ統裁代表ス

常務委員 四名 内庶務 三名 會計 一名トス

庶務ハ本聯盟ノ事務ヲ處理ス

會計ハ本聯盟ノ會計事務ヲ處理ス

上記役員ハ本聯盟秋季定期代表委員會ニ於テ推選シ任期ヲ滿

二ケ年トス

相談役 (若干名)

本聯盟ノ諮問機關トシテ相談役ヲ置ク

評議員 (不定數)

評議員ノ規定ハ別ニ之ヲ定ム

實行委員 (若干數)

實行委員ハ本聯盟ノ事業ヲ遂行スルニ當リ必要ニ應ジテ代表委員會ニ於テ選出セラルルモノトス

### 第五章 代表委員會

第六條 本聯盟ニ代表委員會ヲ置ク

第七條 代表委員會ハ毎年十月、四日ニ定期開會セラルルモノトス

但シ會長必要ト認メタル時ハ臨時之ヲ招集スルコトヲ得

第八條 代表委員會ノ決議ハ最高ニシテ最終ノモノトス

第九條 各加盟スキー團體ハ一名ノ代表委員會ニ出席セシムルコトヲ要ス

但シ代表委員ヲ出席セシムルコトヲ得ザル時ハ委任狀ヲ以テ代理セシムルモノトス

第十條 代表委員會ハ代表委員半数以上ノ出席アリタル場合成立スルモノトス

第十一條 代表委員會ノ司會ハ會長之ニ當ル但シ會長缺席ノ場合ハ常務委員之ニ代ル

第十二條 各團體ハ代表委員名ヲ毎年九月末日迄ニ本部ニ提出スルモノトス

第十三條 代表委員會ニ提出スベキ議案ハ毎年十月ノ定期代表委員會開催二週間以前ニ之ヲ本部ニ提出スルモノトス

第十四條 會議ニ於ケル議決ハ多數決ニ依ル替否同數ノ場合ハ同會者ノ決ストコロニ依ル

第十五條 本聯盟ニ加入セントスルモノハ左記事項ニ明記セル申

第六條 加入申込及加盟承認

第十六條 本聯盟ニ加入セントスルモノハ左記事項ニ明記セル申

第十七條 本聯盟ニ加入セントスルモノハ左記事項ニ明記セル申

第十八條 本聯盟ノ經費ハ加盟團體ノ負擔金及寄附金其ノ他ノ收入ヲ以テ支辨ス

第十九條 加盟團體ハ毎年負擔金五圓ヲ九月卅日迄本部ニ納入スベキモノトス

第二十條 本聯盟ニ加入セントスル團體ハ申込ニ際シ該年度ノ負擔金ヲ納入スルコト

第二十一條 會長、常務委員、實行委員ハ無報酬トス

第二十二條 加盟團體ニシテ本聯盟ノ趣旨ニ反シ聯盟ノ面目ニ反スル行爲アリタル時ハ代表委員會ノ決議ニ基ヅキ除名ス但シカカル團體ノ再加入ハ少クトモ二ケ年間之ヲ保留スルモノトス

込書ニ團體規約及團體員名簿ヲ添付シ申込ムベシ  
團體名、代表者、常務者、事務所

第十六條 團體ノ加盟承認決定ハ代表委員會ノ議決ニ依ル

### 第七章 事業

第十七條 本聯盟ハ代表委員會ノ決議ニ依リ左記事業ヲ行フ

一、秩父宮殿下 高松宮殿下ノ御來遊記念スキー大會

二、スキーニ關スル講演會、研究會、競技會、登山會等

三、毎年スキー年報ヲ發刊スルコト

四、札幌ヲ中心トセル競技會ノ後援

五、其ノ他本聯盟ノ目的ヲ達スルニ必要ナル事業

### 第八章 會計

第十八條 本聯盟ノ經費ハ加盟團體ノ負擔金及寄附金其ノ他ノ收入ヲ以テ支辨ス

第十九條 加盟團體ハ毎年負擔金五圓ヲ九月卅日迄本部ニ納入スベキモノトス

第二十條 本聯盟ニ加入セントスル團體ハ申込ニ際シ該年度ノ負擔金ヲ納入スルコト

第二十一條 會長、常務委員、實行委員ハ無報酬トス

第二十二條 加盟團體ニシテ本聯盟ノ趣旨ニ反シ聯盟ノ面目ニ反スル行爲アリタル時ハ代表委員會ノ決議ニ基ヅキ除名ス但シカカル團體ノ再加入ハ少クトモ二ケ年間之ヲ保留スルモノトス

第二十三條 加盟團體ニシテ本聯盟ノ趣旨ニ反シ聯盟ノ面目ニ反スル行爲アリタル時ハ代表委員會ノ決議ニ基ヅキ除名ス但シカカル團體ノ再加入ハ少クトモ二ケ年間之ヲ保留スルモノトス

第二十四條 加盟團體ニシテ本聯盟ノ趣旨ニ反シ聯盟ノ面目ニ反スル行爲アリタル時ハ代表委員會ノ決議ニ基ヅキ除名ス但シカカル團體ノ再加入ハ少クトモ二ケ年間之ヲ保留スルモノトス

第二十五條 加盟團體ニシテ本聯盟ノ趣旨ニ反シ聯盟ノ面目ニ反スル行爲アリタル時ハ代表委員會ノ決議ニ基ヅキ除名ス但シカカル團體ノ再加入ハ少クトモ二ケ年間之ヲ保留スルモノトス

第二十六條 加盟團體ニシテ本聯盟ノ趣旨ニ反シ聯盟ノ面目ニ反スル行爲アリタル時ハ代表委員會ノ決議ニ基ヅキ除名ス但シカカル團體ノ再加入ハ少クトモ二ケ年間之ヲ保留スルモノトス

第二十七條 加盟團體ニシテ本聯盟ノ趣旨ニ反シ聯盟ノ面目ニ反スル行爲アリタル時ハ代表委員會ノ決議ニ基ヅキ除名ス但シカカル團體ノ再加入ハ少クトモ二ケ年間之ヲ保留スルモノトス

第二十八條 加盟團體ニシテ本聯盟ノ趣旨ニ反シ聯盟ノ面目ニ反スル行爲アリタル時ハ代表委員會ノ決議ニ基ヅキ除名ス但シカカル團體ノ再加入ハ少クトモ二ケ年間之ヲ保留スルモノトス

第二十九條 加盟團體ニシテ本聯盟ノ趣旨ニ反シ聯盟ノ面目ニ反スル行爲アリタル時ハ代表委員會ノ決議ニ基ヅキ除名ス但シカカル團體ノ再加入ハ少クトモ二ケ年間之ヲ保留スルモノトス

第三十條 加盟團體ニシテ本聯盟ノ趣旨ニ反シ聯盟ノ面目ニ反スル行爲アリタル時ハ代表委員會ノ決議ニ基ヅキ除名ス但シカカル團體ノ再加入ハ少クトモ二ケ年間之ヲ保留スルモノトス

第三十一條 加盟團體ニシテ本聯盟ノ趣旨ニ反シ聯盟ノ面目ニ反スル行爲アリタル時ハ代表委員會ノ決議ニ基ヅキ除名ス但シカカル團體ノ再加入ハ少クトモ二ケ年間之ヲ保留スルモノトス

第三十二條 加盟團體ニシテ本聯盟ノ趣旨ニ反シ聯盟ノ面目ニ反スル行爲アリタル時ハ代表委員會ノ決議ニ基ヅキ除名ス但シカカル團體ノ再加入ハ少クトモ二ケ年間之ヲ保留スルモノトス



## 編輯後記

舊年中は皆様から並々ならぬ御愛撫を賜りましたお蔭で「山とスキー」も恙なく越年致しました。茲に深く感謝致します。

本誌のために、記事や寫眞等をお送り下さつて、本誌を賑はして頂いた方に對して衷心より御禮申上げて置きます。

一月號は大變遅れて申譯御座いませぬ。二月號から此の點特に注意しますから御許し下さい。

九十六號の「終りに」のなかに小樽新聞主催のスキー展覽會を今井吳服店で開催の豫定だと書いて置きましたが、會場の都合で、北海道物産館で開かれましたから茲に

訂正して置きます。

一月下旬本會から發行豫定のスキー講演集は、舊臘十二月十一日から二週間に亘つて札幌放送局から放送されたスキーに對する講演を同局の好意によつて、原稿を頂きました。札幌放送局の御好意を茲に御禮申上げて置きます。

本會から本月二十日頃、廣田氏の「スキージャムピング」を刊行致します。經費の都合で、大々的廣告も出来ませんが、山とスキーの讀者諸賢、また、山とスキーに縁のある方々の御力添をお願して飛ぶ様に賣れることを祈つて居ります。

高松の宮様の記念シャントエ開き、インターカレナ大會等の記事は二月一日發行の「山とスキー」で詳しく御報告致します。

●●山とスキーの會

新刊豫告●●●

廣田戸七郎著

# スキージヤムピング

本書はスキー競技に於て最も重要なジヤムプの一切を解説したものである。

新春にあたつて本

會はこの新著を

ジヤムプを研

究せんとす

る人々に

捧ぐ。

四六判

定價

一月中旬發行

別刷寫眞版三十葉  
挿入圖版約五十圖

金壹圓五拾錢



# 氷と雪

全日本スキー聯盟 日本山岳會會員 林學士  
 會長 男爵 稻田昌植序  
 日本山岳會會員 藤木九三跋  
**加納一郎著**

深雪國日本、氷點下氣候の冬季日本に氷雪輪廻の經典出づ。  
 憂鬱を脱した極めて平易流麗な科學的記載。北地の人々に新し  
 き知見を獲得せしめ、南國人にとつて正に驚異と讚嘆の充滿で  
 ある。スキー家、冬季登山家は科學的素養を深めるよりもまづ  
 心の高揚を禁じえぬであらう。

因習的な暗さ、みじめさ、意氣地なさから我等の生活と産業  
 を救うて、明るく、強く、潑刺として氷雪世界に邁進すべく、  
 新著「氷と雪」は深雪國日本の冬に献ぜられた。

## 目 要

一 氷雪思想 氷と雪の魅力—ウイリントン・アルピニズム—人類  
 の氷雪への歩み—雪に對する態度—生命の脅威—雪の功用—雪華  
 圖說—二 水と氷の物理的性質—ケランド・アイス—水の密度—氷  
 と水の膨脹關係—復氷—雪達磨の理論—アイス・スケート—氷の  
 成長順序と種類—氷の厚さと抗壓強—氷の彈性粘性—氷のレンズ  
 —氷の電氣的性質—三 氷の藝術—露の美—發生の要件—模様の  
 成因と種類—氷の立體的作—樹氷の理—霧氷—木花—シガ—氷  
 柱—四 降る雪、積る雪—降雪時の氣温—我が國の深雪地—最大  
 積雪量推定—我が國多雪の理由—雪の成因—雪華の成立—五 雪  
 華の研究—結晶研究史—觀察の方法—雪華の種類—六 積雪の性  
 質とその形態—深さと比重—氷の小屋—雪中露著—熱傳導率—土  
 地の凍結—陽光の積雪に及ぼす影響—風の影響—積雪の種類—積  
 雪の異常形態—雪冠—吹溜—防雪柵—スノーブリッチ—雪庇—七  
 雪崩—雪崩の種類—堆積量—速度—發生時期—雪崩の豫知—雪  
 崩の回避—脱出方法—救助方法—八 氷河と冰山—山岳地の積雪  
 變化—氷河の成生—速度—冲刷作用—氷山  
 の豫知—海水の種類—九 氷期及び人と寒  
 冷—アルプス氷河の消長—極地移動說—炭  
 酸瓦斯說—地球上氷に蓋はるる地方—高さ  
 と氣温—人類常住の最高所—到達の最高所

四六判 裝幀清潔  
 書肆十政 播磨百三二  
 定價二圓五十錢  
 送料十錢

電話 田二七五七番  
 振替 東京七六四四番

房 書 梓

あづさ

東京 神田 駿河 北  
 甲賀 四町 番

GET SUPERFINE SKEES.  
AND MAKE AN  
EXCELLENT  
RECORD!



具用其ト一キスルナ秀優

樽 小

店 具 動 運 屋 梅



アメリカ直輸入

# ヒツコリースキー材

シュブルングスキー  
ラングラウフスキー  
一般用スキー

# Haga Ski



スキー附屬品

---

## 芳賀スキー商店

札幌市同山四丁目  
北海道



SKI HEIL

スキー  
ト

其用與全般

中野商店

スキー印

第一級  
大量製

孔 俛





青 山 泉

高級スキークラックス

オリエント

北風の寒さ

マダカシエツリ

藍屋

野原の空

霧の朝

北風の寒さ

青山温泉の思い出

元 賣 發

會 商 田 飯

目丁二東條一南市幌札

# 青 山 温 泉

北海の靈峰

マツカリヌブリに

連亘する

シリベシの山稜

山稜を飾る

タンネンボイメと

フルフェルシユネー

東洋のサンモリツツと

稱せらるゝ

理想的スキー地

井出さんの

「青山温泉の思ひ出」

のなかゝら

ほか／＼と暖い日を浴びながら、尺餘の雪の下から甦つて来る力強い春の囁きに耳を傾けてゐる時、私の頭に最も明かに浮んで来ることは、御警備班の一員として、秩父宮殿下のスキー一行に御供し奉つた光榮ある青山温泉不老閣に於ける三日間の生活であります。

エウイルインの物語を想ひ起させる様な、珍らしく暗示的な雪は折からの夕陽に例へ様もない程見事な黄金色に映えて居りました。チセヌブリの書く柔く曲線と、ニセコアンの清楚な姿、マツカリヌブリの嚴めしい山影は、銀色と灰色それに黄金色の美しい階調の中に聳えて居りました。その様な美しい情景に飾られた昆布驛へ降り立たせられました殿下には恐れ多くも誠に粗末な馬櫓へ御乗り遊されました。青山温泉に向はせられました。

函館本線昆布驛より一里半

函館より一七時間

札幌より一五時間



あなたの

スキーな

スケート靴は？

イワ井

知れた

札幌の！！

【御申越次第カタログ進呈す】



札幌市南一條西二丁目

岩井靴店

電話一三四番



外國品に勝る 日本最優良の

登録  
商標

# ヒツコリスキー

定價 十五圓より (木部のみ)



弊社製ヒツコリスキーに對し惡宣傳をなし且  
偽物を製造販賣せる奸商がおります故品質に付  
十分御注意下さいませ

スキー兩杖 スキー金具 その他附屬品一切  
スキー服 ブボン 帽子 手袋 その他附屬  
品一切

スキーワックス多數新輸着

ガストバイ メジウム  
ガストバイ ミツクス  
ガストバイ クリステル

## 濃 津 美

神 戸  
東 京  
大 阪

大 阪 南  
名 古 屋  
京 都

卸部……大阪 淀屋橋

工場……大阪 淀屋橋



◆山とスキーの會は北海道帝國大學文武會スキー部の有志が、此の雜誌を發行する爲に作つてゐる會です。

◆スキーを研究せられる人、登山に興味を持たれる方が一人でも多くお読み下さることをお願いいたします。

◆山岳及びスキーに關して何なりとも御寄稿下されんことを願ひます。又印畫の御惠送を切望致します。原稿紙は御申越次第お送り致します。

◆原稿は、。を一字とし、行を更めるときは一字下げる  
こと。

◆記事中の數量は全て、C・G・S系によられん事を望みます。

◆雜誌代金に就て一應下記の諸項を御承知下さい。

本會より發する電信略號を「ヤマ」として居ります。

◆前金切れの時の御知らせは最後の分の包装中に同封して御送りします。次の御送金あるまでは配本を見合せます。

### 定 價 金麥拾錢

\*前金御申込か、現金でなければお送りいたしません。

\*御送金はなるべく振替にてお願い致します。

\*六冊分前金拂込の方には送料を頂けません

\*前金の切れた時の御知らせは最後の分の包装中に同封して御送りします。次の御送金あるまで配本を見合せます。

\*本誌は營利的の刊行物ではありません。紹介。縁故の有無にかゝらず雜誌の代價は頂きます。

昭和五年一月十六日印刷

昭和五年一月十九日發行

(毎月一回一日發行)

編輯者 長 野 寛

印刷兼 發行者 長 野 寛

北海道札幌市北一條西二丁目

印刷所 札幌印刷株式會社

北海道札幌市北二條西三十三丁目

發行所 山とスキーの會

振替水溝八四九五番

La Gazeto  
de la  
Monta kaj Skia Clubo

No. 97. Januaro 1930 Sapporo, Japanujo.

大正十三年三月二十七日第三種郵便物認可  
昭和五年一月十九日發行



M I M A T S U  
MAPLE TOUREN SKIS!

帝大山岳スキー部、早大早高山岳部  
學習院山岳部、陸軍戸山學校、一高、三高  
四高旅行部、法大山岳部等、等、等…御用

冬山登山用具各種

手打「スタイガイセン」6本8本10本爪

手打永斧「ツエルマツト號」30cm.

檢定済「グレチャーザイル」

“META” 燃料及び各種コツヘルアパラート

塗臘用パラ・アパラタト (¥.150)

北米ウキレスロー・スケート會社總代理店  
スイス、META 製造會社日本代理店

合名會社

美 満 津 商 店

東京・本郷・赤門前

山とスキー

第九十七號

定價金參拾錢